

- 1 主題名 親切 2-(2)
- 2 資料名 よりそう気持ちで (自作資料)
- 3 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

内容項目2-(2)は「だれに対しても思いやりの心をもち、相手の立場に立って親切にする。」である。「小学校学習指導要領解説 道徳編 平成20年8月 文部科学省」では、小学校高学年にこの内容項目を指導するとき、相手の立場に立つことの重要性を考えさせることが強調されている。つまり、どのように接し、どのような言動で対処することが相手のためになるのかを十分に指導するということである。また、「思いやりの心とそれが伴った親切な行為を、児童が接する全ての人に広げていく指導も大切である。」とある。高学年の児童は、思考力が増し、相手の身になって人の心を思いやる共感能力が発達してくる。そういった時期に、共によりよく生きようとする力、すなわち「思いやり」という価値観を引き出すことは、大きな意義がある。また、解説でも再三、触れられている様に、児童に他者との豊かなかかわりや人間関係の在り方を指導する事は、特に重視されている。

(2) 児童の実態について

明るく、元気な学級であり、児童それぞれが親切について考えて生活していることが分かる。しかし、日常的な生活の場面では、真の思いやりのある行動ができていのかどうか、心配な様子も見られる。実態調査では、「そっと見守ってあげる」と回答した児童は8人であり、この8人に共通するのは、「その子のやる気と達成感を第一に考えると共に自分が助けていることも隠し、その子の成功を陰から見守る。」という姿勢である。自分が表に出ないで、相手に気付かれないように、相手の立場を尊重する気持ちが感じられる。また、「声で励ましてあげる。」と回答した児童は10人であり、それらに共通するのは低学年の児童とはいえ、自分の係の仕事に満足感をもち自信をもって臨んでいるならば、言葉で直接それを賞賛することによって思いやりを形にあらわしつつ、見守るのが本当の思いやりであるという考えである。なお、「本を少しもってあげる」と回答した児童は12人、「本を全部もってあげる」と回答した児童は1人であり、もってあげる冊数の違いはあっても、この2つに共通するのは「危険に配慮するのが思いやりである。」という考えである。しかし、「本人が満足そうに運んでいる」という前提があるので、本を全部もってあげてしまえば、本人の満足感を大きく損なうことが想像できる。したがって、よかれと思ってしたことが、本当の思いやりにならないことがあるので、相手の立場に立つことの大切さに気付かせる必要があると考える。

☆親切に関する実態調査<平成23年10月14日実施；第5学年3組31人>

質		問
低学年の子が、係の仕事のため、本をいっぱい持って学校の階段を上がっています。重くて危なっかしいですが、本人は満足そうな表情です。それを見たとき、どうするのが本当の思いやりだと思いますか？		
回		答
そっと見守ってあげる	8人	<理由> 満足そうだから手伝いはしない、本人が気付かないところでやるのが思いやりだから、もし転んでしまったら大変だから、など。
声で励ます	10人	<理由> 本人が満足そうだから、言葉ではげましたら元気であるから、など。
本を少し持ってあげる	12人	<理由> 自分が見ているのに持ってあげなかったらあぶないから、満足そうだから少しの方がよい、大変そうだから、など。
本を全部持ってあげる	1人	<理由> 落としたりして本がこわれてしまうから。

(3) 資料について

本資料は授業者の自作資料であり、主人公の美加が体験する三つの場面が盛り込まれている。すなわち、下校時に目の不自由な人に親切心から声をかけるが断られる場面、テレビのニュースで外国の貧しい子どもへの援助の在り方にふれる場面、バスの中でおばあさんに席を譲り、断られるのがその理由に納得する場面である。それらの場面にふれるなかで、本当の意味で相手の立場に立ち親切にするとはいかなる行為なのかを考えることを意図している。

授業においては、まず、目の不自由な人に声をかけるという素晴らしい行為にふれることで、主人公の美加の勇気と思いやりに共感させたい。次に、目の不自由な人から手助けを断られ、落ち込む主人公を通して、声をかけることが、必ずしもその人のためになるとは限らないということにふれさせたい。さらに、バスの中でずっと立っているおばあさんに、席を譲ろうと声をかけて断られるが、その理由に納得する主人公の姿を通して、思いやりとは、相手の立場に立った親切な行為のことを言うが、それを相手も親切と感じるかどうかは吟味が必要であり、自分の価値判断による一方的な見方では思いやりのある行為はできないことを伝えたい。

4 本時の指導

(1) ねらい

主人公の判断を理解することを通して、だれに対しても思いやりの心を持ち、相手の立場に立って親切にするための判断力を育む。

(2) 準備

読み物資料、ワークシート、挿絵、発問カード（掲示用）、実態調査結果（掲示用）

(3) 展開

流れ	学習活動と発問	予想される児童の反応	教師の支援
関心をもつ	<p>1 自分たちの親切に関する意識について考える。</p> <p>○前回の意識調査の結果を見ていろいろな人の考えにふれましょう。</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・親切に関する実態調査の結果を黒板に貼りだし、話し合う。 ・ねらいとする価値にふれ関心をもたせる。
↓ 深める	<p>2 読み物資料「よりそう気持ちで」を読み話し合う。</p> <p>○モヤモヤした気持ちになったのはどうしてでしょう。</p> <p>○おばあさんから目をそむけたのはどうしてでしょう。</p> <p>◎断られたのに、どうして、すこしあたたかくなったのでしょうか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・せっかく親切にしたのに断られて腹が立ったから。 ・嫌な気持ちになるなら声をかけなければよかったと後悔したから。 ・自信がなかったから。 ・迷っていたから。 ・うしろめたい。 ・よかったけれど、自分にとっての親切が、いつ、誰にとっても親切だとはいえないとわかったから。 ・相手の気持ちを考えることが大切なんだなと思ったから。 ・親切な行為はいいものだと思ったから。 ・断られなくてよかったと思ったから。 	<ul style="list-style-type: none"> ・美加の不安といらだちに共感させる。 ・児童の発言をメモし、類型化して板書する。 ・美加の葛藤する心に共感させる。 ・児童の発言をメモし、類型化して板書する。 ・まず、個人で考えさせた後に生活班で話し合い、その後、一斉隊形に戻して意図的指名による話し合いをさせる。友達の考えと自分の考えを比較する中で価値に対する考えを深められるようにする。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> <p>☆期待する姿が見られなかった場合の指導言葉かけで、親切な申し出を断るといふことはどのような気持ちからかを考えさせ、人と人の立場の違いに気付かせる。</p> </div> <p>◎相手の立場に立って親切にするためには、どのように判断することが大切かを考えることができたか。（ワークシート、発表、観察）</p>
↓ 見つめる	<p>3 授業を振り返り、感じたことを話し合う。</p> <p>○相手のことを思って言ったことやしたこと「よかった」と思った経験と、その時の気持ちを発表してみましょう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・気持ちよかったのです。そのことを心がけたい。 ・気持ちよかったので自分にとって大切だと思った。 ・親切はいいものだ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・机を向かい合わせの形態に変え、「リレー方式」で児童が主体的に話し合えるようにする。
↓ つなぐ	<p>4 教師の説話と、「心のノート」P44の詩の朗読を聞く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・全員静かに、教師の説話と詩の朗読を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・相手の立場に立って親切にしようとする思いを温め、今後の発展につなぐようにする。

よりそう気持ちで

小学校五年生の美加は、その日、一人で下校していた。おだやかな秋の陽射しが降り注ぎ、歩いていては、ただけでも気分がいい日だった。だが、ふと気が付くと美加の前を、杖をついた男性が歩いていて、どうやら目の不自由な方のように。辺りは交通量の多い道で、美加と男性が歩いていては、歩道にはガードレールもなく見るからに危なっかしい。美加は、そのまま行き過ぎようか、迷ったが勇気を出して声をかけた。

「あの・・・、私が案内しましょうか？」

するとその男の人は、

「結構です。私には必要ありませんから。」

男の人はそう言って美加の申し出を断り、そのまま行ってしまった。

美加は、ショック半分、腹立たしさ半分で、モヤモヤした気持ちになった。

家についても、美加の心は晴れなかった。

その日の夕方、家族でテレビを見てみると、ある外国の貧しい町の様子が報道されていた。何気なく見ていた美加だが、キャスターの言葉が胸に残った。

「私が、やせ衰えた子どもに、持っていた缶ジュースを差しだそうとしたら、ベテランのボランティアがそれを止めるんです。『この子の親は、この子にジュ

ースを買ってあげるお金がありません。だから、この子にその味を覚えさせることは、この子のためにならないのです。』というのです。」

物を与えてしまうよりは、よりそう気持ちで、本当にためになる手助けをすることが必要なのだという。

父と母が、こう話しているのが聞こえた。

「いつまでもこの人がこの子のそばにいて、ジュースを買ってあげられる訳ではないものね。」

（ふーん、そんなものか。いつも一緒にいて手助けをできるわけではない、か・・・。じゃあ、今日、私が出会った、目の不自由な方によりそうとしたら・・・？）テレビが次のニュースに切り替わっても、美加はその事を考えていた。

次の週末、美加は母と隣町のショッピングセンターまで買い物に出かけた。楽しく一日を過ごし、帰りのバスは満員だったが、美加と母は運良くすわることができた。

（よかった。一日疲れたから、すわられてラッキーだな。）

そう思いながら走り出したバスにゆらけていると、しばらくして、美加が座っている席のななめ前に、おばあさんがつり革につかまって立っているのに気付いた。バスに空いている席はない。他にも立っている乗客がいる中で、おばあさんは、なんだかさわさわと落ち着かない様子だ。

（あのおばあさんに席をゆずった方がいいかな？）

美加は一瞬^{いつしゆん}、そう思った。しかし、ためらってしまった。周りに座っている他の乗客の顔を、こっそり一人ずつのぞいた。すると、そのおばあさんと目が合いそうになって、美加はあわてて目をそむけた。

しかし、美加は意を決しておばあさんに声をかけた。

「あのう・・・。よかったら、席に座りませんか。」

声をかけられて、おばあさんは少しびっくりした様子だったが、すぐに笑^え顔^{がお}になってこう答えた。

「おねえちゃん、ありがとう。でもね、私は、こうして立っていないといけないからね。このままでいいですよ。」

おばあさんは、小声で美加にわけを話した。

「もうすぐ、窓^{まど}の外から、私の孫のお家が少しだけ見えるの。イスに座ってしまうと見えなくなってしまうから、私はいつも座らないで外をながめているんですよ・・・でも、本当にありがとうね。お気持ちだけ受け取っておくわ。」

席にもどった美加に、母はこう言った。

「美加、いいことをしたわね。結局、断られたけどあなたの気持ちはちゃんと通じているから大丈夫^{だいじょうぶ}よ・・・でも、この次にバスで、あのおばあさんに

お会いしたら、席をゆずらないのが思いやりかもね。」

母は、美加に笑いかけた。

美加は、なるほど、と思った。

今日の出来事といい、この前の目が不自由な人の件けんといい、テレビのニュースの件といい、よく考えてから行動に移うつさなければいけないことはたくさんありそうだ。

母と二人で、バスの外の景色をながめながら、美加は心が少しあたたかくなつたのを感じた。







